# アジア史講座

## 第1巻

監修　京都大学教授　田村実造
　　京都大学教授　羽田明

# 中国史1

先史時代
原始国家の時代
最初の統一帝国
南北対立の時代
隋・唐の世界帝国
学術・思想
宗教・文学
美術・工芸

岩崎書店

# アジア史講座 1

## 中国史 1

京都大学教授
田村実造
京都大学教授　監修
羽田明

岩崎書店

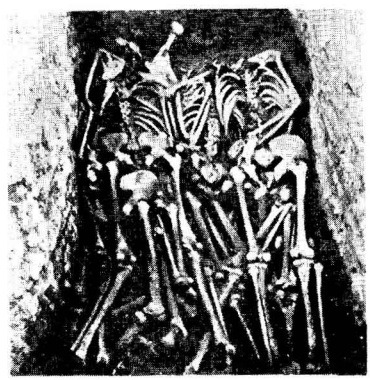
アジア史講座　第1巻　中国史1

検印廃止　著者諒承

1957年9月1日印刷
1957年9月5日発行　定価360円

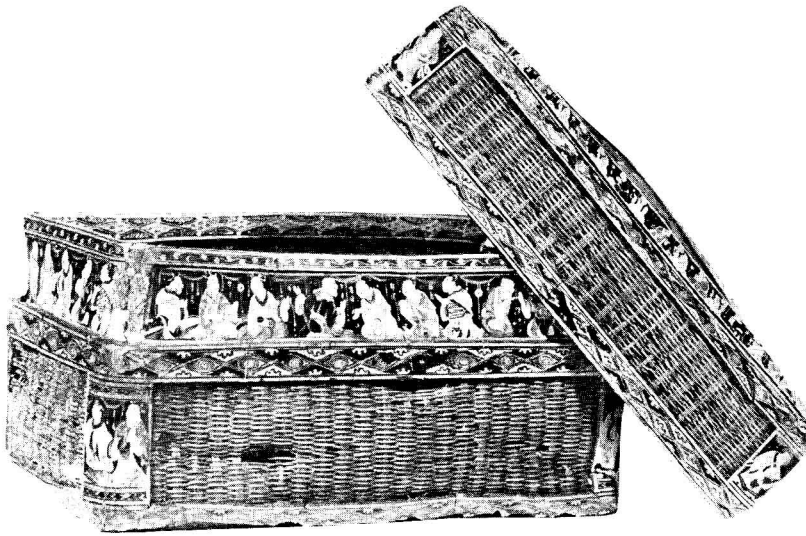
監修者　田村実造　羽田明
発行者　岩崎徹太
印刷　新興印刷製本株式会社
製本　株式会社　福島製本

発行所　東京都千代田区神田神保町1丁目65　振替東京96822　株式会社　岩崎書店
編集部　東京(291)3121-4
営業部　小石川(92)8095

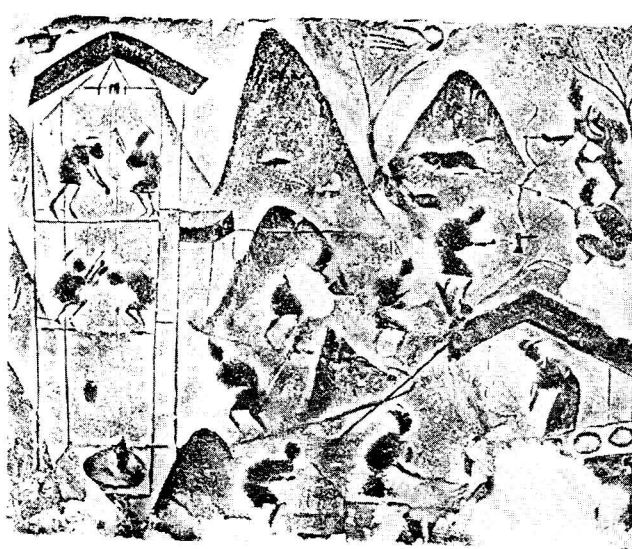


安陽の西北岡で発掘された殷代大墓

上　殉葬人骨が多数ならび，上方の坑には馬が埋められている。
下　左は犠牲にされた無頭人骨。右は同墓から出土した鼎。

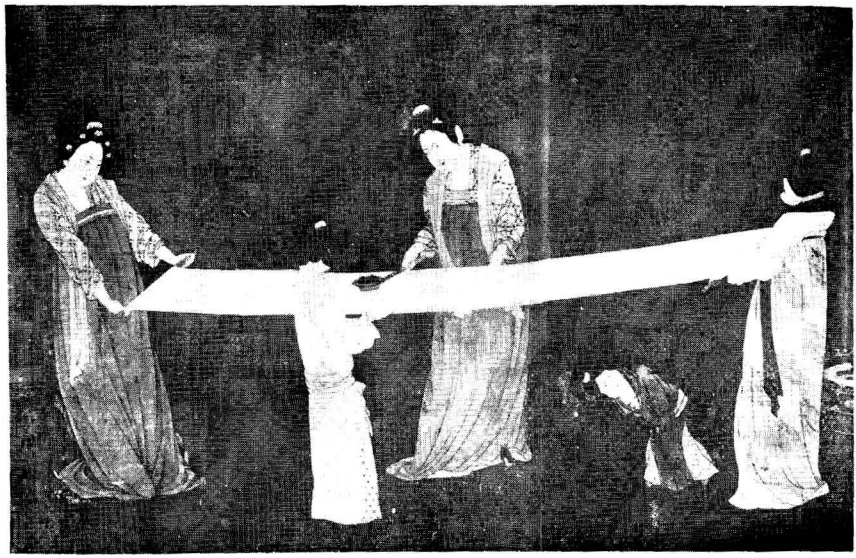


漢代の彩篋（朝鮮樂浪漢代古墳出土）

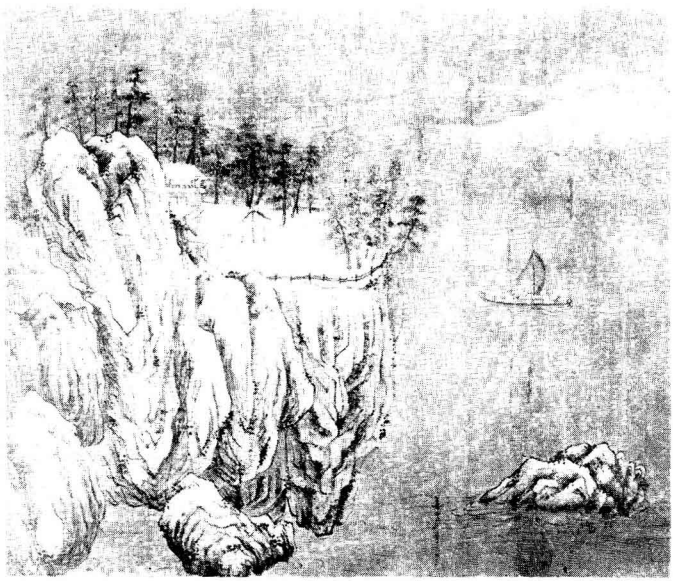


漢代の石刻画（塩井による製塩の図）

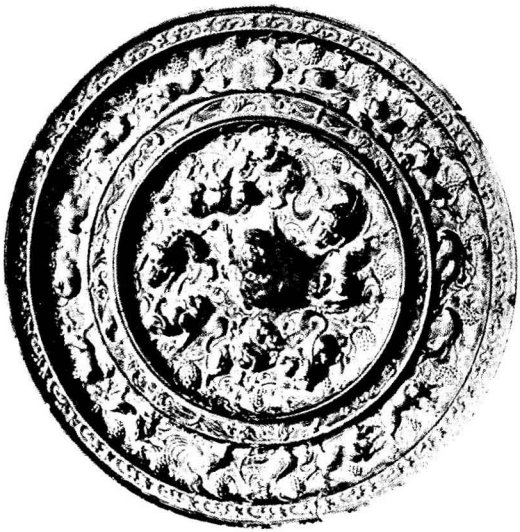
试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

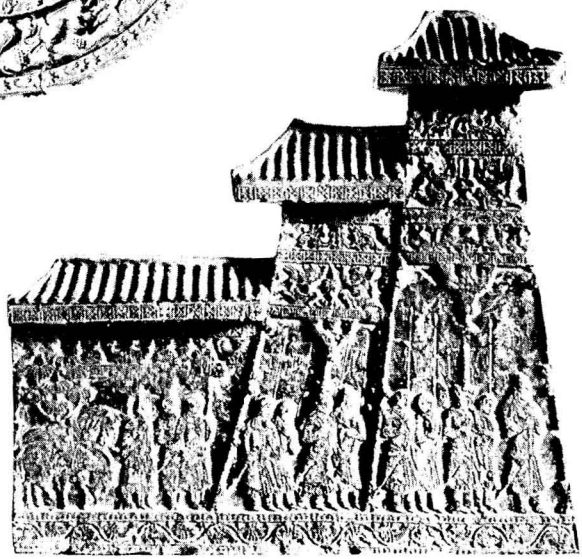


唐の張萱　美女搗練図巻（宋徽宗摸）の一部



唐の王維　江山霽雪図巻の一部





上　海獣葡萄鏡（隋代）
下　墓飾石闕（中央アジア風の人物行列が見られる—隋代）

# はしがき

よく「アジアは一つだ」といわれるが，歴史上からは，アジアは決して一つではない。周知のように，すでに先史時代から，中国文化圏・インド文化圏・西アジア文化圏および北アジア遊牧文化圏などに分れて，それぞれ固有のすぐれた文化が形成されている。そして，これらの文化圏を基盤にそこに東アジア・南アジア・西アジア・北アジアの4つの歴史的世界が近代にいたるまで個別的に並存してきたのである。

このようなアジアの歴史的現実にもとづいて，この講座も全6巻のうち第1巻から第3巻までを中国を軸心とする東アジア史，第4巻を北アジア史（附　中央アジア史，チベット史），第5巻をインドおよび東南アジア史，第6巻を西アジア史と東西交通史とにあてることにした。最後の第6巻に収めた東西交通史は，アジアにおける4つの個別的歴史世界が，過去において，どのようなお互いの交渉をもってきたかを，まとまったかたちで考察したものである。

本講座の執筆者は，その大部分の人たちが，京都大学東洋史研究室出身の少壮学究であり，かれらが，現に従事しつつある専門の時代なり分野なりを，それぞれ分担してもらった。しかし，そのため各巻・各章の論旨に一貫性を欠く弊におちいることを防ぐため，各巻ごとに責任編集者を設け，その人びとを中心に，いくたびかの討論をかさねたのち，はじめて執筆にあたるという方針をとった。

毎巻の責任編集者は，第1巻には河地重造（大阪市立大学助手），第2巻には，池田誠（立命館大学助教授）・岩見宏（神戸大学講師），第3巻には北村敬直（大阪市立大学助教授），第4巻には佐藤長（京都大学助教授），第5巻には佐藤圭四郎（京都大学講師）・藤原利一郎（京都女子大学助教授），第6巻

には藤本勝次（関西大学講師）の諸君があたったが，こうしてまとめられた原稿を，さらにわれわれ両名が調整・監修した。したがって，もし本講座の内容上，不備な点や思わざる誤りを犯したところがあるとすれば，それは一に監修者の責任であることをおことわりするしだいである。

なお，この講座の特色について一言すると，つぎのような諸点があげられるであろう。

アジアの歴史を，その歴史的構造にしたがって，東アジア（中国史）・北アジア・南アジア（インド史・東南アジア史）・西アジアに分冊して敍述した。とくに中国史には最初の3冊をあて，近代・現代に重点をおくとともに，各時代にわたり最新の研究成果をとり入れることにした。

従来，講座形式のものは，執筆者が異るごとに，各巻各章でその立場や論述にちぐはぐな点が多く，まま読者を当惑させるような場合があったが本書はこのような欠点にできるだけ注意をはらって，アジアの歴史発展をたやすく把握できるように努めた。

このため，政治・社会・経済を相関的に考察するとともに，これに並行して，学術・思想・宗教・文学，および美術・工芸などの文化的諸相を照応させつつ，それらの展開についても，できるだけくわしく述べることにした。本文中には，地図・さし絵・図表などを許すかぎり多く収め，また各巻末には年表・索引および重要史料・参考文献をかかげ，史料・参考文献には，良心的な解説を附して読者の理解に資することにした。

最後に，本講座の出刊については，岩崎書店の方がたに，一方ならぬお世話になったことを感謝したい。

1955年5月

京都大学東洋史研究室
田　村　実　造
羽　田　　明

# アジア史講座　目次

はしがき

序　　説

世界史の構造とアジア史……1

歴史の地域性と時代性　近代世界と前近代世界の歴史的構造

アジアの地域性……5

アジアの歴史的世界とアジア史の時代区分　中国史の時代区分

第1章　先史時代……12

1　中国の旧石器時代……12

北京原人　旧石器時代の遺蹟

2　中国の新石器時代……15

農耕文化のはじまり　黄土　彩陶文化　黒陶文化　彩陶と黒陶の問題

第2章　原始国家の時代……24

1　殷の王朝……24

甲骨文字　殷墟の遺蹟　殷王朝の発生地　殷代の物質文明　殷代の社会　殷の王

2　西周の時代……34

周の勃興　周の制度　西周時代の社会　諸侯の国　被支配者階級　周の東遷

第3章　最初の統一帝国……43

1　春秋戦国時代……43

春秋から戦国へ　激動する社会　都市国家から領土国家へ　戦国の七強国

崩れゆく旧秩序……46

農業の発展　土地所有制の変化　商工業の発達　郡県制

漕　漕　商鞅の改革　人材登用と合従連衡

2　秦・漢帝国の成立……53

古代的統一帝国の基礎……53

豪族と小農民　小作制　始皇帝と漢高祖の政治　始皇帝の

政治　北辺の問題　秦帝国の崩壊　項羽と劉邦　漢初期

の政治

3　武帝の時代……61

武帝の政治の側面　郷里の制　豪族・地主と官僚制的専制支

配　対農民・商人政策　帝室財政

内政と遠征の敢行……66

内政　張騫と匈奴征伐　フェルガナ・南越・朝鮮の征略

漢帝国支配の傾斜

4　後漢帝国……71

王莽の新国と滅亡……71

王莽　王莽の政治　赤眉　後漢帝国の成立　後漢王朝の

政治　豪族の進出　門閥形成のきざし　礼教的社会　対

外関係

後漢時代の社会問題……76

零細経営農民　豪族問題　党錮の獄　黄巾の乱と後漢帝国

の崩壊

第4章　南北対立の時代……80

1　争そう三国と晋の統一……80

三国時代　対立する三国　東アジアの情勢と三国の対外発展

三国の性格　魏の屯田制　兵戸制　晋の統一と南遷　晋

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

の国内統一　五胡の活動　東晋の建国　九品中正法

2　南朝貴族制社会の成立……86

貴族制社会……86

南朝の政治　貴族荘園と部曲制

両晋・南朝の諸政策……89

鄉里制の変化　戸調式　占田・課田法

3　華北の戦乱と北魏の統一（北朝）……92

五胡十六国……92

最初の征服王朝―北魏王朝の成立　徙民政策　対外関係

孝文帝　均田制

4　統一への動き……98

北魏帝国の分裂と南朝のうごき……98

北魏帝国の動揺　六鎮の反乱　北斎と荘園　府兵制　南

朝のうごき　統一へのうごき

第5章　隋・唐の世界帝国……103

1　隋の再統一……103

隋朝の創建　統一事業　頃と畝について　高句麗遠征と大

運河建設　内乱の勃発

2　唐の支配体制……110

農民戦争と唐朝の建設　貞観の治　均田制　均田農民

官僚機構　三省六部制　世界帝国　都護府

3　均田体制の破綻……123

帝国の動揺　新しい農村の芽生え　武周革命　開元・天宝

時代　軍閥の発生・内乱

4　唐帝国の解体と新しい社会……136

藩鎮体制の出現　両税法　貨幣経済の発展と荘園制　中央

集権制再建の試み　黄巣の乱

等6章　学術・思想 …… 147

1　帝と天の思想…… 147

殷代の祖先崇拝　天の思想　礼の文化

2　古典文化の形成…… 154

春秋戦国の思想家たち…… 154

孔子　儒家　墨家　道家（老子と荘子）　法家　その他の思想

3　古典文化の展開…… 163

秦・漢の思想界…… 163

焚書と阬儒　武帝時代の儒と法　漢代の儒家思想　讖緯説　訓詁学　後漢の儒教思想　司馬遷と中国の歴史学

魏・晋・南化朝の学術思想…… 171

清談　世説新語　北朝の学術

唐代の学術思想…… 175

五経正義の成立　古文運動

第7章　宗教・文学 …… 179

1　宗　　教…… 179

仏教の伝来と民族宗教への刺戟…… 179

民族宗教への対立　仏教の伝来　初期の経典と翻訳　五斗米道と大平道

仏教の発展と道教…… 182

魏・晋の仏教と道教　東晋・南北朝時代の仏教　北朝の仏教と新天師道

仏教諸宗派と道教…… 185

隋・唐の仏教　唐代の道教

外国から伝来した諸宗教…… 186

祆教　マニ教　景教

2　文　　学…… 189

歌謡・占い師・書記の散文　哲学・歴史の散文・屈原の詩

賦・民謡・司馬遷の「史記」　四六文・陶淵明の詩・逸話集・

神怪小説　詩・古文・伝奇・変文・語録

等8章　美術・工芸 …… 193

1　絵画と書道…… 198

秦・漢時代の絵画と画家　絵画の種類　魏・晋・南北朝時代

の絵画と画家　隋および唐代前期の絵画と画家　唐代後期の

絵画と画家　両漢・南北朝時代の書道　隋・唐時代の書道

2　工芸と彫刻…… 208

殷・周時代の工芸　両漢・南北朝時代の工芸　隋・唐時代の

工芸　両漢時代の彫刻　南北朝時代の彫刻　北朝の彫刻

隋・唐時代の彫刻

# 序　説

戦後わが国では，高等学校や大学などで旧来の東洋史と西洋史とにあたるものを総合して世界史とよんでいるが，がんらい世界史ということばはすでに明治時代から，たとえばランケの世界史学とか，ウェールズの世界文化史などとかいわれて，よくききなれている。しかしこのいみの世界史は，ヨーロッパ中心にみた歴史であり，アジアに関しては，ヨーロッパないしはヨーロッパ人に関連のあるかぎりにおいてだけ，扱われているにすぎない。これに対して，現在行われつつある世界史は，ともかく東洋史と西洋史とを合したものであるため，従来，ヨーロッパ中心に考えられてきた旧世界史が，アジアの歴史的発展を，ほとんど除外しているのにくらべれば，かなり世界の歴史に近いといえよう。

ところがこの世界史は，社会科の一部門として扱われているので，歴史の発展を順序立てて学んでいくというよりも，むしろ現実社会の問題を解決する手がかりを，世界史上の史実からとりあげつつ歴史の発展を理解することに，眼目がおかれているように聞いている。このようであると，歴史の教育は，項目主義的な傾向におちいりやすくなる。たとえば「古典文化」という項目をとりあげることによって，ヨーロッパの古典文化としてのギリシア・ローマ文化をのべ，その基盤としてのギリシアおよびローマの社会や政治や経済をみる。同じようにまた，アジアの古代文化としてのインドのヴェダ文化や中国の儒教文化を考察し，その下部構造としての，インドや中国の社会・経済・政治をみるというような工合である。

しかし，このような学習法だとすると，歴史学にとって，その構成要素である時代性と地域性とに関する認識があいまいになり，しぜん歴史的発

展に対する理解力が，欠如するおそれがある。この欠陥を補正するためには，やはり一応，世界史に関する構造とか，その展開とかについて，考えておく必要がある。

## 世界史の構造とアジア史

**歴史の地域性と時代性**　歴史学は単なる抽象的な学問ではない。過去において，人間社会および人類の文化は，どのように形成され，またどのように発展したかを，正しく具体的に理解させるものは，歴史学をおいてほかにはない。それゆえに，歴史を学ぶことによってえた，知識と経験とにもとづいて現在の社会なり文化なりを，より深く理解し，それを正しい方向に進展させることも，またわれわれ歴史家の大きな責務でなければならない。このように，歴史学は人間生活に即しつつ，具体的にそれを把握することを本領とするがゆえに，歴史はつねに，空間（地域）と時間との二つの面をもっている。いいかえれば，歴史を学ぶにあたって，その基本的要素となるものは，地域性と時間性とである。歴史は，この二つの面の関係づけにおいて，理解されなければならない。地域性に対し時間性が関連づけられていくことによって，歴史的世界が成立する。ただし歴史学でいう地域性とは，単に，地理的世界としての土地だけではなく，地域とともに，そこに居住する民族，およびその民族によって形成される社会をもふくめたものであることに注意しなければならない。

つぎに，歴史における時間とは，歴史的発展そのものであるともいえよう。この歴史的発展を，具体的に認識し把握するには，一応これを区切って考えることが便宜である。便宜であるからというばかりではない。人間にとって，現在自己がそこに生存し活動しつつある歴史的状態を確認するために，じぶんらの祖先が，遠い過去から歩んできた人間社会や文化の発達のあとを，具体的に秩序づけようとすることは，必然的要求である。そ

のため人類の歴史を，時代別に区分しようとする試みは，きわめて古くから各民族の間に行われている。たとえば，ギリシアにおいては，すでに紀元前8世紀ごろ，農民詩人ヘシオドスが，時代5分法（金・銀・青銅・英雄・鉄）を立てて，歴史の各時代に配置している。また中世においては，キリスト教的歴史観が支配的であった。しかし，これらはみな人間にとっては，運命的に神々によって定められたもので，いわゆる超歴史的，宗教的自覚の立場から，世界史を統一的に把握しようとしたものである。

ところが近代になると，人類の歴史的発展そのものを直視することによって，これを古代・中世・近代の3つに分つという時代3分法が成立した。今日のところ，この古代・中世・近代に分つ3区分法，ないしは，これにさらに現代を加えた4区分法が，世界史の時代区分に対し，高い妥当性をもつものと考えられている。しかしこの区分法は，ヨーロッパの歴史発展の中から成立したものであるから，アジアにおいては，それを適用する上に，いろいろの困難や支障が生じて，古代・中世・近代を，はたしてどの時期において区分するかについては，まだ定説をみないありさまである。そのためヨーロッパとアジアを通じた世界史を，われわれアジア人の立場において構成づけるということになると，たれしもその困難さに，ため息をつかざるをえなくなる。しかし，ここで一つの手がかりになるのは，近代とそれ以前という一線であろう。

**近代世界と前近代世界の歴史的構造**　現在われわれが意識するような世界の構造，それは地理的世界と歴史的世界とが，完全にその範疇を同じうしている世界。政治・経済・思想・文化などすべての事象が，常に有機的にからみ合っている世界，すなわち，普遍的統一体としての世界。このような構造をもつ世界を出現させたのは，16世紀以来全世界に進出したヨーロッパ人の活躍によるものである。ヨーロッパ人による世界のヨーロッパ化，ヨーロッパ文化による世界の一体化が，近代を特色づける一つの指

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com